

大相撲名古屋場所鑑賞感想雑記
(どえりゃあことじゃ!)

平成 30 年名古屋場所、ネガティブなコメントはし始めたらいくらでもあるし、誰にでもできる。こういう場所にこそポジティブな素材を見つけ出すことが大事。

中日が過ぎたある日、友人に今場所の感想を尋ねられた。その時の咄嗟にこう答えた。

「巧さと力強さで朝乃山、巧さと美しさの他に何となく心配もある遠藤、落ち着いて相撲を取っているのが御嶽海かな」

朝乃山は先場所あたりから力を発揮し出した。突き押しの相撲で勝っていた時期があったが、右四つの型も持っている。どちらでも取れるというのはあまり褒められないことが多いが、朝乃山の場合は違う。立ち合いで、まず相手に圧力をかけて前進し続ける。そしてその動きの中で、四つ身になったりはず押しになったり、突き押しで勝負を付けたりと多彩に対応出来る。常に前に圧力をかけながら次の仕事の準備をしているので、いつの間にか相手の陣地に入り、土俵際も近づいている。さらにそれを支える下半身の構えが安定している。相手が何か小細工しようとしてももう逃げ場がない。24 才、西前頭 13 枚目で 11 勝 4 敗・敢闘賞、この先が楽しみな力士の一人である。

朝乃山と同じように、安定した下半身で相撲を取る遠藤も上手さが光る力士の一人。膝の角度・腰の位置・足首の曲り具合という基盤の上で前傾姿勢を取るので安定感があり、相手からも攻められにくい。まわしの取り方・まわしを取る位置・体の寄せ方など基本が身につけているので、見ても美しさがある。ところが、突進・突撃型の力士に先手を取られると、同じ人物とも思えないような無様な負け方をする欠点がある。今場所は東前頭 6 枚目、中日まで 7 勝 1 敗で何かを期待した人は少なくなかったようだが、後半戦を 1 勝 6 敗と失速してしまった。まだ何が足りないのだろうか。

御嶽海は低い姿勢から、しかも下から持ち上げるようなはず押しで攻めて、相手を横向きにさせる威力を持っている。突き押しの場合は阿炎のように伸び上がって手を出すのではなく、飽くまでも低い姿勢から相手の低い位置を突いていくので効果的。まわしを取っても相撲が取れるが、投げには拘らず寄り身を基本としている。これらの動作を繰り出す前に体全体が相手の陣地に向かって前進しているのが大きな特徴で、しかも土俵際でしっかり腰を落として、「最後のツメ」を誤らないのが良い。

今場所、千載一遇の機会を利用して 13 勝 2 敗で優勝賜杯を手にしたのは充分評価に値する。

毎度のことのように来場所は「数合わせの大関取り論議」が騒々しくなるに違いない。近年、安定度の低い大関・横綱を生み出している角界が、再び危ない橋を渡ることにならなければ良いが・・・。

参考情報として、御嶽海の過去 6 場所（一年間）の成績と主な対戦者との戦績を示してみた。

場所	成績	現在の横綱・大関との対戦（勝＝○ 敗＝● 対戦なし＝×）				
		白鵬	鶴竜	栃ノ心	豪栄道	高安
29 年 9 月	8 勝 7 敗	×	×	○	●	×
29 年 11 月	9 勝 6 敗	●	×	×	○	●
30 年 1 月	8 勝 7 敗	×	○	×	●	●
30 年 3 月	7 勝 8 敗	×	×	●	○	●
30 年 5 月	9 勝 6 敗	●	●	●	×	×
30 年 7 月	13 勝 2 敗☆	×	×	×	○	●
六場所合計 (勝率)	54 勝 36 敗 (0.600)	0 勝 2 敗	1 勝 1 敗	1 勝 2 敗	3 勝 2 敗	0 勝 4 敗

* 註：横綱稀勢の里との対戦は全くないので、表に載せる対象としなかった。

先場所、自己最高位の西前頭 3 枚目まで躍進した豊山は、2 勝 13 敗と大きく跳ね返されて今場所は西前頭 9 枚目からの出直し。「自分の進むべき道は押し相撲」と自覚し、迷いなく突き押しに徹している姿が感じられた。また、脇を固めて下から絞り上げるようなはず押しはかなりの威力がある。千秋楽の御嶽海との対戦を征したが、双方が持てる力を出し切った大熱戦でテレビを見ていても「手に汗を握る」素晴らしい取り組みだった。前半は 5 勝 3 敗と目立たない存在だったが、後半戦を無敗で突っ走ってしまい、12 勝 3 敗で敢闘賞を受賞、今場所のままの相撲を来場所以降も取り続けていけば、上位陣にとって怖い存在になるに違いない。楽しみな存在になってきた。

一月場所では東前頭筆頭まで躍進した北勝富士も大きく跳ね返された上に怪我もあり、長いトンネルの中を歩いて来た結果、今場所は東の幕尻まで来てしまった。幕尻まで落ちると「勝ち越さねば・・・」の意識から、毎日星勘定をすることになる力士が多いと聞くが、今場所の北勝富士の相撲にはそれは感じられなかった。豊山同様に、低い位置からの突き押しと頭を付けたはず押しが最大の武器で、額の生え際を見るとよくわかる。静かに着実に星を重ねて、11 勝 4 敗で再起の引き金を引いた感じがした。

20 代の力士の活躍がめざましいという「時代の境目を感じる場所」の中で、中堅・ベテラン力士の活躍にも注目に値するものが数多くあった。

星数では 8 勝 7 敗と目立たない存在だったが、勢の相撲には光があった。「昔からの勢らしさ」の他に「30 才を過ぎた勢らしさ」に満ちあふれている土俵が数多く見られた。

前半は上位陣との対戦で星が上がらなかったが、鶴竜からの金星もあり、徐々に調子が上がってきた。差し手に拘って下手投げなどの無理な取り口があった昔と比べて大きく違ってきたのは、立ち合いの鋭さと、速い動きで前へ出ながら、良い位置で取れたまわしを引きつけての寄り身が目立った。

怪我がもとで一時は十両に陥落もした妙義龍が、先場所の 10 勝 5 敗に引き続き 9 勝 6 敗の成績を上げて、復活を感じさせた。膝の曲がった低い姿勢は白鵬・遠藤と並ぶ美しさと安定感がある。ここに前さばきの上手さとスピードを加えて、昔の妙義龍が少しずつ戻ってきているように感じた。適当な大きさの体・広い肩幅・背中に張り巡らされた筋肉・鍛えられた証の臀部の肉、勝負が終わって花道を引き揚げていく妙義龍の後ろ姿には他の力士にはない美しさがある。

栃煌山も一月場所の怪我がもとで幕尻近くまで下がっていて、先場所あたりから復活の途上。

東前頭 13 枚目で 10 勝 5 敗の成績を上げて誰も驚かない。「栃煌山ならこの地位でこの位の成績はあたりまえ」との評価が多く、気の毒な力士かもしれない。立ち合い前に「両差しを意識した腕の構え」をする。立ち上がった瞬間、イメージ通り腕の先に相手の体が来てくれれば圧勝するが、そうならなかった時には惨敗するという面白い力士である。同じ部屋の栃ノ心に先に大関昇進を果たされて、内心穏やかならぬところではないかと思うが、本人に聞いた訳ではないので事実関係はわからない。

今場所活躍した力士達に共通している点は、「基本を押さえたきちんとした相撲」という点に尽きる。戦国時代化しつつある大相撲の世界、ここから抜け出てくる次世代を担う力士達が、単に時代の寵児として現われるだけでなく「基本に忠実な正統派の相撲をとる力士達」であることは、大いなる救いであると、私は見ている。

ところで、今場所私が注目していたもう一つの見所は安美錦。先場所は怪我により幕尻で 4 勝 11 敗と大敗して十両に落ちてしまった。東十両西 4 枚目、勝ち星次第では一場所で再入幕も可能な地位。中日まで 6 勝 2 敗と優勝争いの先頭集団に入っていたので、「もしかして」と思った方もいたようだ。千秋楽を終わって 9 勝 6 敗、幕内から十両へ陥落する人数と、十両上位の好成績者の人数との兼ね合いもあり、番付編成会議が終わってみないと解らないが、幕内復帰の日が少しずつ近づいているような気がする。

以上